

ふるさと
見て歩き

川崎城（下小瀬城）

市内には、南北朝時代から戦国時代にかけての城跡が三十カ所以上も残っています。その多くは、高部城や小瀬城のように、佐竹氏の二、三男家によってつくられた、佐竹庶流の城です。

一方で、部垂の乱（部垂義元が兄の佐竹義篤に討たれた佐竹氏の内紛）や佐竹の乱（山入の乱）では、これら市内の諸氏勢力は佐竹氏本家と対立する立場をとっています。その結果、佐竹本家と合戦になった経緯を持つ城も多数あります。

今回はその一つ、緒川地域下小瀬地区にある川崎城について紹介します。

◇川崎城とは

川崎城は、下小瀬地区川崎にあるため、下小瀬城とも呼ばれます。

『新編常陸国誌』によれば、川崎城は、小瀬城、小瀬高館などを築城して小瀬郷を領し、足利尊氏の奉公衆でもあった小瀬氏初代の義春の次男孫二郎常悦が築いた城です。常悦以後八代が川崎城を居城としました。八代で絶家した後は、佐竹本家から遣わされた人物が川崎を名乗り、佐竹氏の秋田移封までこの地に住したといわれています。

◇川崎城のすがた

現在の川崎城は緒川の左岸、川の蛇行によってできた半島状の高台に築かれた平城です。南北に二つの舌状台地が連なり、南は縄文・古墳時代の遺跡（川崎遺跡）として包蔵地に指定されています。一方、川崎城は北側の舌状台地上に築かれています。緒川に向かって張り出した台地は東西・南北ともに最大で百メートルほどの広さがあります。台地中央

の高台が主郭と想定され、全体では五、六の曲輪で構成されているようです。北側には高さ八〇センチほどの土塁が長さ十メートルほど残り、台地の中央部に堀跡らしきくぼみが南北に走りますが、それ以外には大きな遺構はみられず、段差によって曲輪を区切っているようにみえます。また、城の西端は昭和三年の緒川の改修工事により大幅に削られていくようです。現在、西端部は櫓台状



▲川崎城鳥瞰図（余湖浩一氏作図）



▲北側の土塁

の高台になっていますが、工事前にどのような遺構がどれほどの規模で存在していたのかは残念ながら不明です。

現状では、川崎城は南・西・北の三方を緒川に臨む崖で守っていますが、東側の防御施設は明確ではありません。東側の高台及び山にも当然防御施設が想定されるところです。川崎城跡の城域は現在よりも拡大する可能性が出てきました。

◇部垂の乱で落城

川崎城は、文献史料から、戦によって落城していることが分かる数少ない城跡です。

享祿二年（一五二九）から天文九年（一五四〇）まで続いた部垂の乱の余波が下小瀬まで及び、川崎城も主戦場となったようです。天文四年（一五三五）の『東州雜記』に「下小瀬ノ河崎城十月十八日落」とあり、川崎城が落城していることが分かります。また、水戸市加倉井町の日蓮宗妙徳寺に残る過去帳には「天文八年三月部垂前小屋落打死亡魂、同七年三月口尾瀬一戦亡魂」とあり、天文七年にも口尾瀬（小瀬の口の意味、下小瀬か）で戦いがあったと推定される記述があります。上小瀬の立野神社の天文十八年（一五四九）棟札の銘文にも、戦乱のために勧進ができない旨の記述が確認されています。天文期の小瀬周辺の混乱状況をうかがい知ることができます。

歴史民俗資料館大宮館

52-11450



▲城跡東側の山